

演歌歌手による地域活性化は可能か

—演歌歌手ジェロと出雲崎町—

マネジメント学部 マネジメント学科

佐野 涼子

1. はじめに

新潟県中越沖地震は、2007年7月16日10時13分23秒に発生した、新潟県中越沖を震源とする地震である。新潟県上越市、小千谷市と並び新潟県出雲崎町は震度6弱という激しい揺れを観測した。出雲崎役場が発行している『広報いずもぎき』(2008年9月号)によると、2008年8月1日現在の出雲崎町の被害総額は概算で約25億1千万円(公共土木・農林水産業施設等)にのぼり、住宅や道路などに大きな被害が出た。この他にも、中越沖地震では県内外で、多くの死者、負傷者、家屋への被害、停電、断水、道路の隆起、陥没、交通網のマヒ、がけ崩れなど物的、人的被害は大きく各地に深い爪痕を残した。

同時に、震災がもたらすものは目に見えるものだけではない。被災した人々の心や精神は、地震への恐怖や、孤独、経済的な不安、などさまざまな危機にさらされる。また、心に受けたダメージは、ものとは違い、金や時間をかければ元通りに直るとは限らない。そのため、人々の心の支えとなるものが必要であると言える。中でも人々の心にできた傷を治したり、やわらげたりするものの一つとして文化の力が大きな影響を持つと考えられる。文化活動により、人々は精神の支えを作り、さらに人と人とがつながることによって震災から本当の意味での復興を遂げられるのではないだろうか。

本稿では、地震で多くの被害を受けた出雲崎町と、デビュー当時から出雲崎町と関わり深い演歌歌手ジェロを取り上げ、震災から復興、そして現在までのあゆみを追うことによって、音楽、特に日本の音楽に欠かすことのできない演歌と演歌歌手が、地域を活性化することはできるのかを考察する。演歌というと一般に、年齢層の高い人の物であり、若者にはウケない、と言われていた。確かに演歌を好むのは、地方の高齢者である。だからこそその特性を利用すれば、高齢化の進む地方での影響力は大きいと考えられる。また演歌歌手は地方の活動が中心になるため、地域に根を張りやすく、これが地域の利害と一致すればどちらも盛り上がる。このように演歌というひとつのジャンル、そして演歌歌手が持つブランドは地域を元気にする力を持っていると本稿では仮説を立てた。一方で、地方に住んでいる人が皆、演歌好きであるというわけではないだろう。行政が演歌歌手を用いて地域活性化をするのであれば、興味を持っている住民はもちろん、興味のない人々にもいかに興味を持ってもらうか、応援しようという気持ちを起こさせるかも重要である。また行政が演歌歌手を呼んでイベントを行うのなら、どのような目的、目標があるのかをきちんと住民に理解してもらわなければならないと考える。これらの課題は、地域の文化振興に欠かせない公共文化施設の存在意義とも共通している。まちにいくら立派な公共文化施設があっても、それが建てられた目的や、施設の理念、目標を住民に理解してもらわなければ、税金の無駄遣い、ハコモノと批判されるのと同じである。

これらの共通点を踏まえた上で、演歌歌手のジェロの出演した復興イベントが、出雲崎の地域や人々にどのような影響を与えたのか、演歌歌手による地域活性化は可能かを、出雲崎町役場の資料や、出雲崎町職員への聞き取り調査、実際に筆者が見た復興イベントの様子などを用いて検証していきたい。

2. 出雲崎町について

まずは出雲崎町の観光資源、人口、観光客の推移などから出雲崎の特徴や課題を見ていく。出雲崎町は新潟県のほぼ中央、日本海に

面した約 10 kmの海岸線を持つ、海あり、山ありの風光明媚な町である。米どころ新潟の名のとおり、農村部は稲作に適した土壌で、2008年産米の1等米比率では県内1位と米の優良産地でもあり、合鴨を放ち完全無農薬・有機栽培で育てた「愛かも米」や、2008年からは汐風で天日乾燥させた「汐風米」といったブランド米がある。また海岸部は昔から絶好の漁場であり江戸幕府3代将軍家光に鱈を献上したこともあるなど魚の本場でもあり、漁港ではこの辺でも珍しく夕方にセリ市が行われ、新鮮な魚が食卓に並ぶ。また出雲崎は遠く神話時代に大国主命によって開拓されたと伝えられており、紙風船の生産量は日本一、また、良寛生誕地・芭蕉詠嘆地・江戸時代天領地・近代石油産業発祥地として歴史の深い町である（出雲崎町観光協会ホームページより）。主要な観光地は、越後出雲崎天領の里である。敷地内には約300年前の華やかににぎわった天領の時代を再現した天領出雲崎時代館や、日本海に延びる長さ102mの木製の夕風の橋は、橋の欄干に鎖を結び鍵をかけると恋が成就すると言われている。その他にも、出雲崎の海の幸などの土産物が購入できる物産センター、屋外のイベント広場ではジェロのコンサートをはじめ様々な行事に使用される。また、芭蕉園、出雲崎石油記念館などが主要な観光地として挙げられている。このように、出雲崎町には多くの自然や歴史、観光資源が息づいている。しかし同時に、現代の日本が抱える少子高齢化や、過疎化が進んでいる地域であるとも言える。

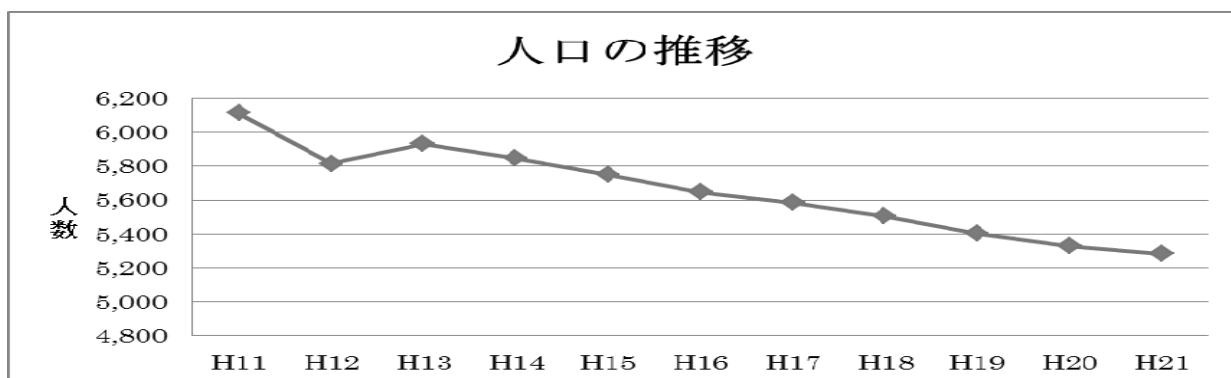


図1 出雲崎町の人口の推移

資料：出雲崎町役場町民課 『住民基本台帳』より作成

図1に示したのは近年の出雲崎町の人口の推移である。平成11年度から平成21年度までの出雲崎における人口の推移は、平成12年度の急激な減少を除き、ゆるやかな減少を続けている。平成11年度の人口が6,113人に対し、平成21年度は5,284人となり、10年間で829人の減少である。その上で注目したのは図2で示した老年人口の割合である。

年度	人口	老年(65歳以上)人口			老年人口割合
		計	男	女	
	人	人	人	人	%
H14	5,847	2,048	779	1,269	35
H15	5,750	2,048	776	1,272	35.6
H16	5,648	2,014	761	1,253	35.7
H17	5,585	1,993	754	1,239	35.7
H18	5,506	1,968	741	1,227	35.7
H19	5,404	1,952	730	1,222	36.1
H20	5,328	1,924	718	1,191	36.1

図2 出雲崎町における総人口に対する老年人口の割合

資料：出雲崎町役場保健福祉課『老年人口の推移』より作成

出雲崎の老年人口割合は毎年35%以上を記録しているが、この数字はどのような意味を持っているのだろうか。総務省によると、日本における65歳以上の老年人口（平成22年9月15日現在推計）は2,944万人で、日本の総人口に占める割合は23.1%となっている。その中で図2に示した出雲崎町の老年人口は、平成14年からほぼ横ばいで、平成20年は36.1%となっており、日本の平均である23.1%を大きく上回る数値である。このことから、出雲崎は日本社会と比較しても、高齢化の進んでいる地域と言える。では次に、出雲崎の未来を支える子どもの数を図3で見てみよう。

区分 学校名	16年度		17年度		18年度		19年度		20年度	
	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数
出雲崎 小学校	11	260	11	254	9	234	8	221	8	216
出雲崎 中学校	7	172	7	149	6	147	6	138	6	133

図3 出雲崎町における児童、児童数の推移

資料：出雲崎町 教育委員『児童、生徒数の推移』より作成

図3では出雲崎の生徒、児童数の推移を示した。過去5年間を比較すると、小中学校とも生徒数は年々減少し、学級数も減少していることが分かる。以上のことから、出雲崎は少子高齢化の進む地域であり、したがって、衰退しつつある地域であるとも言える。また、次に地域活性化にかかわりの深い観光客の推移を図4に示した。

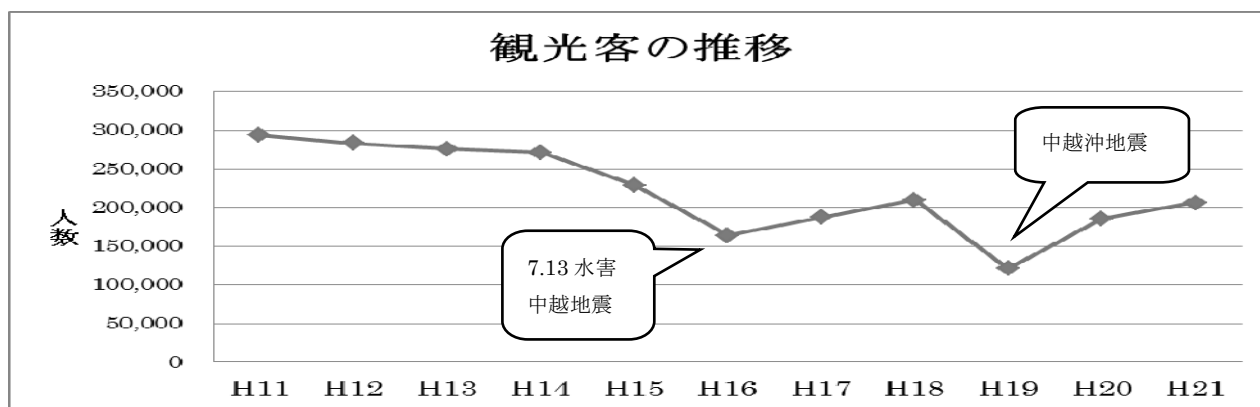


図4 出雲崎町の観光客の推移

資料：出雲崎町役場産業観光課より入手した資料により作成

図4を見ると、中越地震や7.13水害に見舞われた平成16年(2004年)と、中越沖地震の発生した平成19年(2007年)は出雲崎への観光客が著しく減少していることがわかる。特に中越沖地震のあった2007年は、過去10年間で最低の121,000人という観光客数となり、風評被害なども含め出雲崎の観光に大きな打撃を与えた年であったと言える。

以上のように、出雲崎町は近年多くの地方が悩まされている少子高齢化、また災害による産業の縮小、風評被害による観光客の減少などの問題に直面していると言える。だが、それらの問題は一見すると地域のマイナスの要素であっても、見方を変えればプラスになることもある。例えば高齢化においては、裏をかえせばそれだけその土地に高齢者層が多いため、高齢者に向けたサービスや、マーケットの戦略が立てやすいと言える。その意味で、出雲崎町は演歌と相性が良いと考えられるのではないだろうか。さらにその演歌歌手から出雲崎を全国にアピールしてもらうことにより、災害による風評被害を抑えることもできるのだ。では本当に演歌は高齢者や地方と相性が良いのだろうか、次の章で具体的な演歌のビジネスモデルや特性を見ていく。

3. 演歌ビジネスと地方の関わり

はじめに、**演歌とはどのように定義された音楽なのか**を見ていく。『新編 音楽中辞典』によると、「演歌とは日本の大衆歌謡のひとつ。明治前期に演説代わりにうたわれた壮士節が政治性を失い、プロの演歌師が街頭で歌詞を売り歌い広めるものとなった。曲はときどきの流行をとり入れ、伴奏にヴァイオリンも用いたが、昭和期以後はレコード歌謡に押され演歌師は姿を消した。戦後は恋愛を扱った歌詞にヨナ抜き音階、ユリ、コブシなど伝統的要素の強い曲をつけた歌を演歌(艶歌)と称した」とある。しかし、演歌ルネサンスの会編『演歌は不滅だ』では、「客観的にいって、『これが演歌だ』なんて決まりはないわけだ」と言い切っている。更に「現在の演歌は、昭和40年前後に、流行歌から枝分かれし、音楽の一ジャンルとして成立したといわれている。流行歌の中でも西欧の影響がより強いものは『ポップス』、浪曲、民謡などの日本古来のものをより受け継いでいるのが『演歌』。その中間が『歌謡曲』。『演歌・歌謡曲』とひとくくりにするのも多い」と書かれている。このように演歌は、音楽のひとつのジャンルとして定義するのはなかなか難しい。しかし、どのような人が聞き、どのようなメディアを通していくのかを見ていくと他の音楽ジャンルにはない「地方」という特性が見えてくる。本稿では事例として取り上げる出雲崎町を地方と定義する。地方とは東京をはじめとする都市と呼ばれる地域以外を指す。その上で、演歌の特性やビジネスが、地方とどのような関わりを持っているのかを見ていく。

演歌が地方に強い理由の一つは、演歌を支えるのは地方局、UHF局であるということだ。テレビの中でも演歌系の歌番組は、首都圏の民放地上波で言えば、テレビ東京系で放送された『演歌の花道』が2000年9月に終了し、現在では北島三郎がパーソナリティを務める『サブちゃん&歌仲間』などが流れているのみだ。では演歌専門のテレビ中継がまったくなくなったのかといえばそうではない。地方発のUHF局では数多く、演歌、ないしカラオケ番組が放映されている。たとえば、テレビ埼玉では、20年以上も続く『カラオケ一番』という番組を午後8時のゴールデンタイムで放送している。視聴者参加型の番組ではあるが、ゲスト歌手として紅白出場クラスの歌手から新人まで、多彩な顔ぶれが並ぶ。他にも歌手がMCを勤め、ゲストを招いてトークしながら、プロモーションビデオで曲を紹介するタイプの番組も週10本以上放映している。テレビ埼玉に限らず、地方局、UHF局ではこうしたタイプの番組は多い。ビジネスの面で言えば、地方局に演歌番組が多い最大の要因は、制作費の安さにある。キャンペーンのためとなれば、まだ知名度の低い歌手たちはわずかなギャラでも出演し、スポンサー探しまで行う可能性もある。キー局に比べ、少ない予算で番組作りを行っている地方局、UHF局にとっては、ありがたい話である。

また二つ目に演歌歌手は他のジャンルの音楽と比べて、実際に地方のレコード店などにキャンペーンに行くケースが多いということだ。そのためにはあらかじめ番組に出て告知しておくことが有効である。ファンにとっても、好きな歌手の情報を知ったり、身近に握手をしたりできる。普段都市から遠く離れている地方に住む人々にとって、他ジャンルの歌手よりも、演歌歌手のほうがファンの密着度がより高いといえる。

最後に何より、演歌が東京などの大都会よりも地方で愛好者が多いことがあげられる。生活観としても、丸の内のビジネスマンよりも、漁師や農家の人たちのほうがより演歌になじみやすいのではないかと。細川周平の『サンバの国に演歌は流れる—音楽にみる日系ブラジル移民史』によれば「歌の場として、歌は日本人の最も民衆的な楽しみ、最も手っ取り早い娯楽のひとつだった。言い換えると困難の最中にあっても、歌う素材や場や動機を見出すことができた」とある。都心部に比べ娯楽の種類が限られる地方では歌の存在は大きいのではないだろうか。また、演歌の傾向としてはやはり愛好者が40代以上の高い年齢層が多いことから、高齢化の進む地方のほうが自然に演歌の愛好者は増えていくといえる。以上のような、演歌ビジネスの特徴を表1にまとめた。

表1 地方と都会の演歌との関わり比較

	地方	都会
演歌愛好者	多い	少ない
テレビ局	UHF局、地方局が演歌番組を多く放送 (需要が多い上に番組製作費が安く抑えられるため)	首都圏民放ではほとんど放送されていない
演歌歌手	他のジャンルの歌手よりも多くキャンペーンに足を運ぶ	キャンペーンのためレコード店に足を運ぶ

このように、演歌と地方には密接な関係があることがわかった。また以上のことから地方に強い演歌の特性を、出雲崎は生かせると考えられるのではないだろうか。次の章では更に具体的に、ジェロが出雲崎で行ってきた活動についてみていく。

4. 演歌歌手ジェロと出雲崎町の関わり

はじめに、演歌歌手ジェロについてみていく。ジェロは2008年2月シングル「海雪」でビクターエンタテインメントよりデビューした。そしてこの「海雪」に出雲崎というフレーズが3回登場するのである。オリコン総合シングルチャートでの初登場第4位は、演歌・歌謡曲の新人ソロ歌手として史上初のベスト10入りを果たすとともに過去最高位を記録した。その後も数々の記録を塗り替えている。そして、「ベストヒット歌謡祭」「日本有線大賞」「日本レコード大賞」という音楽賞のすべてにおいて最優秀新人賞を獲得するとともに、念願の「紅白歌合戦」への初出場を果たした。一聴しただけでは日本人としか思えないその歌声は、初めて聴いた者すべてを驚愕させる(ジェロオフィシャルウェブサイトより)。また、オリコンスタイルホームページによると、ジェロが売れた理由についてこのように考察されていた。「黒人演歌歌手というだけで注目を集め、そのギャップに誰もが驚く＝話題性にワイドショーが飛びつき、その結果ものすごい露出量になったが、売れた理由はそれだけではない。やはり彼の実力、そしてなにより秋元康¹⁾作詞、宇崎竜童²⁾作曲の楽曲の良さ、これが三位一体となって今回のビッグウェーブにつながったのではないだろうか。また携帯のダウンロードランキングでも上位に顔を出しており、若者からの支持が大きかったことも忘れてはいけない」とある。このことから、ジェロは演歌歌手の中でも、他の演歌歌手にはない要素を持っていると言える。一つは史上初の黒人演歌歌手という一目見ただけで誰もがわかるインパクトの強い肩書きである。さらに、その肩書きだけでは終わらない歌唱力が備わっていたこと。さらにワイドショーに積極的に顔を出すことで勢いをつけていったことである。さらに演歌のファン層とは外れた若者に支持を受けたということだ。

では、当時ブレイク中だったジェロは出雲崎で具体的にどのような活動をしていったのだろうか。また町民がどのようにしてジェロを応援したのかを『広報いずもぎ』を中心に調べ上げ、以下の表1にまとめた。なお、各活動でジェロが実際に出雲崎を訪れたものは(訪)を付けた。

表2 ジェロの出雲崎町での活動

2008年	
2月17日	ジェロ出雲崎初訪問(訪) 出雲崎町役場職員の前で「海雪」披露 天領の里でミニライブ
2月20日	ジェロ CD「海雪」でメジャーデビュー
5月7日	ジェロ『ジェロ 海雪。——僕とおばあちゃん』の撮影のため出雲崎を訪問(訪)
5月13日	ジェロさんを紅白に!! 「海雪」CD 一世帯一枚購入町民運動
8月10日	震災復興祈願イベント第二弾 夕風ドリー夢カーニバル出演(訪)
8月11日	ジェロ初の自伝エッセイ、写真集『ジェロ 海雪。——僕とおばあちゃん』青志社より発行
11月2日	震災復興祈願 ジェロさんの紅白出場を祝う会開催
2009年	
1月1日	ジェロから新年のあいさつが届く
4月1日	ジェロがいずもざき観光大使に就任 就任式で記念ライブを行う(訪)
8月1日	震災復興祈願式年次イベント第2弾 夕風ドリー夢カーニバルⅡにジェロ出演(訪)
11月8日	震災復興祈願 ジェロさん紅白出場必勝祈願町民総決起集会開催
11月23日	「第60回 NHK 紅白歌合戦」2年連続紅白出場が決定 ジェロからお礼のメッセージメールが届く
2010年	
1月1日	ジェロから新年のあいさつが届く
4月18日	慕進いずもざきイベント第1弾 いずもざき観光大使就任1周年記念式典(訪)
8月14日	慕進いずもざきイベント第2弾 夕風ドリー夢カーニバルⅢ(訪)

資料：『広報いずもざき』各号より作成

では、ジェロを町民がどのように応援していったのかを見ていく。やはり歌手である以上共通して重要となってくるのは、どれだけ多くの人々に自身の出した曲を聞いてもらえるかということである。その点でジェロにとってデビュー曲となった「海雪」は、ジェロがヒットするかしらないか、外国人演歌歌手という未知数の素材が受け入れられるかという意味で鍵となった曲である。結果的にジェロの「海雪」は大ヒットし、世間から注目を集めることとなったが、その「海雪」のヒットの影には、舞台となった出雲崎の応援もあったと言える。

一つ目は、表2にもあるように2008年5月からジェロの紅白出場を叶えるため、出雲崎役場と観光協会が連携し「海雪」を購入した世帯に助成金を出した町民運動である。演歌歌手ひとりのためにこのような補助金をまちから出すケースは珍しく、注目を集めた。また、出雲崎の全世帯に配布された案内では「ジェロの紅白出場の夢を住民の力で叶えたいという思いと同時に、この購入運動をきっかけとして中越沖地震の復興に弾みをつけるとともに、地震に負けない元気な出雲崎を全国に発信し、地域の活性化を図りたい」と書かれている。プロの歌手にとって必要なCDを売るという活動を応援することで、さらにジェロや「海雪」の知名度、人気を上げることに繋がるのはもちろん、ジェロが多くのメディアに露出することが、出雲崎をアピールする効果的な方法であると出雲崎町が考えていたことがわかる。住民にとってみれば、CDやカセットテープを買うというシンプルで分かりやすい行為が、地域活性にもつながるといっても重要なポイントである。なお、助成金額は「海雪」のCDまたはカセットテープの販売価1,200円に対して500円とし、1世帯に1枚限りとなる。その結果、合計申請数は710世帯に登った。2009年3月31日の住民基本台帳によると、世帯数は1,822世帯であるため、購入世帯は全体の約39%と推定できる。またCDとカセットテープの内訳を見ると、CDは567世帯、カセットテープ143世帯とカセットテープは全体の20%を占めている。CDや、デジタル配信が主流となっている昨今ではあるが、やはり高齢者が多い出雲崎では、まだカセットテープは根強く普及していることがわかる。

演歌歌手の特徴として、ファッションやビジュアルよりも、その歌手の内面、滲み出るような演歌の心が重要となってくる。ジェロに関して言えば、そのビジュアルも世間に大きな衝撃を与えたといえるが、それだけでは決して成功しなかった。青志社から発行されたジェロの写真集『ジェロ 海雪。——僕とおばあちゃん』では、出雲崎をロケ地としてジェロの撮りおろし写真、そして自伝エッセイが綴られている。207ページのうち、その約半分が出雲崎の景色、人々、そしてジェロの写真に割かれている。出雲崎の特徴である妻有の街並みや、木々の美しさ、日本海の景色はもちろん、撮影協力として出雲崎町役場をはじめ、地元の旅館や路線バス会社、鮮魚店や町の食堂、観光地である天領の里、光照寺、そして出雲崎町のみなさん、とある。写真集を見ると、地元の小中学生や光照寺の住職、役場の職員がジェロの隣に並んでいる写真がたくさんあった。素朴で、日本の伝統文化が息づくこれらの写真からは、読者に懐かしい故郷、ふるさとや人々のふれあいやさらに日本の心とも言われる「演歌」を連想することができるのではないだろうか。

では次に、出雲崎において開催されたジェロが出演した震災復興イベントについてまとめる。

■2008年8月10日 震災復興祈願イベント第2弾 汐風ドリー夢カーニバル

汐風ドリー夢カーニバルは、夢と希望を音楽に乗せて元気な出雲崎を全国に発信し、災害からの復興を大きくアピールすることを目的としたイベントである。午前の部は出雲崎保育園、出雲崎小学校の鼓笛隊演奏、出雲崎秀和会による「出雲崎おけさ」の歌と踊りと演奏、小木ノ城太鼓、出雲崎中学校太鼓同好会、出雲崎中学校吹奏楽部のパフォーマンスが行われた。また、午後12時30分より午後の部のイベントに向けた自由席が開場となった。午後の部のイベントスタートは午後4時30分より出雲崎町長挨拶に始まり、与板警察署交通課長講話、新潟県警音楽隊演奏、民謡歌手であり出雲崎おけさ全国大会に出場、優勝経験もある剣持雄介³⁾、そして演歌歌手ジェロが出演した。なお、午後の部終了後花火打ち上げを予定していたが、悪天候のため翌日に開催された(『広報いずもぎき』(2008. 8) p.4より)。2月に行われたデビュー前のジェロの「プレミアムミニライブ」では、7分足らずで整理券がなくなってしまうほどの大人気だったという。デビューそして、「海雪」発売から約半年たち人気、知名度ともに日本のトップクラスになってからの出演ということで、町内外から多くの観客を集めた。本イベントでは、小林出雲崎町長が「この災害を逆手にとって元気な出雲崎をアピールしたい」とあいさつし、続いて柄沢県議会議員から「出雲崎はジェロさんという応援団を得てますます元気になった」と話した。ジェロは「海雪」や「氷雨」「本牧メルヘン」などを熱唱。その後、出雲崎のジェロさん応援隊の代表として、小林町長、海雪カラオケ大会優勝者の三富信芳、出雲崎小学校6年生の児童たちがステージに上り、ジェロとの対面を果たした。最後はジェロの「たくさんの方に来ていただいてありがとうございます。胸がいっぱいです。皆さんの応援があって今のジェロがあります。これからも応援よろしくお願ひします」とのメッセージとともにステージは終了した(『広報いずもぎき』(2008. 9) p.4より)。

メインイベントはやはり、ジェロのコンサートである。一日を通して行われるが、午前中は出雲崎町の町民団体によるパフォーマンス、午後からはジェロをはじめ新潟県警、民謡歌手と町外からゲストを呼び開場を盛り上げている。午後の部はチケットが必要な場合もあるが全て無料で参加することができるのも特徴である。なお、午後の部の会場の入場は一般エリア指定席(客が事前に申し込みをしなくてはならないもの)が1,000人、特別エリア指定席として旅行会社ツアー客が200~400人、出雲崎町の新潟県中越沖地震応急仮設住宅入居者へ、そして予約なしで用意された自由席(スタンディング)1,000人程度が用意された(『広報いずもぎき』(2008. 5) p.4より)。実際の一般エリア指定席の申し込み状況は、町内786人、町外606人で合計1,392人に上り一般エリア指定席を超える申し込み人数となった。

■2008年11月30日 ~震災復興祈願~ジェロさんの紅白出場を祝う会

これは、ジェロのNHK紅白歌合戦出場を町民一同で祝い、更に震災復興への弾みにしようというイベントである。紅白出場が決定した11月25日、役場では紅白出場を祝う懸垂幕が掲げられた。イベント当日の午後4時、町中央公民館にはジェロの紅白出場をみんなで祝おうと、会場には入りきれないくらいの大勢の方々が集まった。祝う会は、ジェロからのお礼のメッセージ、参加者全員での海雪合唱など、お祝いムード一色となった。このほか、出雲崎駅前に紅白出場を祝うイルミネーションが設置されるなど、明るいニュースに町全体が沸き立ち、震災復興への弾みとなった。なお、ジェロからのお礼メッセージは以下のとおりである。

「出雲崎の皆さんこんにちは。ジェロです。

おかげさまで紅白出場が決定いたしました。町民のみなさん、本当にありがとうございました。

デビューしてから皆さんが、いろいろなかたちで応援してくださって、本当に心から感謝しております。

8月に参加させていただいたイベントも本当に素晴らしく、忘れられない日です。またお会いできるのを楽しみにしております。

これから、紅白に向けて精一杯頑張りたいと思いますので、引き続きよろしくお願ひいたします。」

(『広報いずもぎき』(2008. 12) p.10より)

■2009年1月1日 ジェロから新年のあいさつが届く

新年のサプライズということで町民に向けジェロから新年のあいさつが広報いずもぎきに掲載された。

「出雲崎のみなさま、あけましておめでとうございます。

去年はみなさんのおかげで夢の舞台に立つことができ、とてもうれしいです。

今年もつづけて紅白に出られるように頑張りますので、応援よろしくお願ひします。 ジェロ」

(『広報いずもぎき』(2009. 1) p.4より)

■2009年4月19日 演歌歌手ジェロ、観光大使就任式

観光大使就任式は、いずもぎき観光大使に就任したジェロを町民一同で祝って開催された。就任式は町民体育館で行われ、開場は午後5時であったが開場前から大勢の方がジェロを一目見ようと並んだ。一番早く並んだのは朝の7時30分頃から茨城県から駆けつけたファンであったという。第1部の式典では小林町長が「観光大使就任を快諾していただき、この上ない喜びです。そして、震災からの復旧・復興に勇気と希望を与えてくれたジェロさんに心からお礼を申し上げます」とあいさつ。そして、任命書がジェロに手渡され、会場は大きな拍手に包まれた。第2部の記念ライブまでは、就任を祝う出雲崎おけさと吹奏楽の演奏が行われた。出雲崎秀和会と吉祥会が出雲崎おけさと唄と踊りで披露し、出雲崎中学校の吹奏楽部は「海雪」を演奏して会場を盛り上げた。記念ライブで久しぶりの出

雲崎にジェロは「うれしいです。いつも温かく迎えてくれる。アットホームな感じです」と答えた。また、昨年学年全員でジェロさんを応援し、現在は出雲崎中学校1年生から応援DVDと色紙がジェロに手渡された。全5曲を歌い終えたジェロから最後に「皆さん最後までありがとうございます。出雲崎の皆さんのおかげで紅白にも出場することができました。心より感謝申し上げます。これからは観光大使として歌手として、出雲崎のことをがんがん宣伝していきますので、これからもよろしく願います。ありがとうございます」と語った（『広報いずもぎき』（2009. 5）p.4より）。この日は約1,500人が就任式に集まったという。町民はジェロとの“きずな”をより強くしたのはもちろん、ジェロのファンである県外から客を集めていた。

■2009年8月15日 震災復興祈願式年次イベント第2弾 汐風ドリー夢カーニバルⅡ

汐風ドリー夢カーニバルⅡは、昨年に引き続き観光大使となったジェロのライブをメインとしたイベントである。また同日、中越沖地震により中止されていた船まつり・大花火大会も、3年ぶりに開催された。当日は少しでも前の席を確保しようと、会場前から大勢の人が並んだ。司会は新潟のラジオでもパーソナリティーをしていたこともある番井奈歩が務めた。カーニバルは新潟県警察音楽隊の演奏、民謡歌手剣持雄介による出雲崎おけさ、岩室甚句などである。トリは昨年と同じくジェロで曲目は「やんちゃ道」「えいさ」「海雪」などが歌われた。また、全国に先駆けて新曲「爪跡」を披露した。またジェロのスペシャルサポーターの出雲崎小学校6年生から、ジェロへ応援メッセージが送られた。最後は花火が打ちあがり、カーニバルは終了した。なお、午前中に行われた船まつりは、お札渡し、出雲崎保育園鼓笛隊演奏、船団パレード、出雲崎小学校金管部演奏、出雲崎中学校吹奏楽部演奏、出雲崎中学校たるばやし演奏、小木ノ城太鼓演奏（小木ノ城地区振興会）、出雲崎おけさ（秀和会）、仮面ライダーディケイドショーなどが行われた（『広報いずもぎき』（2009. 7）p.2~8より）。船まつり、汐風ドリー夢カーニバル、大花火大会を通した3つのイベントには延べ45,000人が来場した。汐風ドリー夢カーニバルⅡの入場について、あらかじめ予約を取らなければならないエリア指定席は2,000人分の席を確保し、予約のいない自由席（スタンディング）は2,000人程度を予定していたが、実際のエリア指定席への申し込みは町内560人、町外566人、合計1,126人であった。

■2009年11月8日 震災復興祈願 ジェロさん紅白出場必勝祈願町民総決起集会

ジェロさん紅白出場必勝祈願町民総決起集会は昨年に引き続き、ジェロのNHK紅白歌合戦出場を町民一同で祝い、更に震災復興への弾みにしようというイベントである。イベントでは、ジェロからのメッセージビデオの放映、中静佑介、大野まさや（NAMARA）のお笑いライブ、磯辺真由美⁴⁾の歌、中学校吹奏楽部の演奏などが開催された。訪れた町民は大応援旗を作成し、ジェロへ向けてメッセージを書いた。その他、来場者特典として、ジェロ所属事務所提供のオリジナルジェロステッカー、ジェロの写真入りポストカード、出雲崎産米新ブランド「汐風米」のおにぎり試食が行われ、他抽選で50人に「もずく麺」が配られた。またジェロから感謝のメッセージビデオが届き、放映された。

メッセージ全文「出雲崎の皆さんこんにちはジェロです。今年は出雲崎の観光大使にさせていただきありがとうございました。また、今年もこうして皆さんが集まって、決起集会を開いていただき大変うれいす。僕は今、コンサートツアーで全国のいろんなところでコンサートをやらせていただいています。もちろん海雪を歌う時に、出雲崎を思いながら毎回歌っていますよ。これからは心をこめて、いい歌を歌い続けていくことが皆さんの期待にこたえることだと信じて一生懸命頑張ります。皆さんも、今後とも応援よろしく願います。本日はどうもありがとうございました」と語り、12月の広報でもジェロからお礼のメッセージが掲載された。「いつも応援ありがとうございます。みなさんの熱い応援のおかげで、今年も紅白歌合戦に2年連続で出場できることになりました。本当にありがとうございました。ジェロ」。この日はおよそ300人が集まった（『広報いずもぎき』（2009. 12）p.2.3より）。

■2010年4月18日 鷲進いずもぎきイベント第1弾 ジェロさん“いずもぎき観光大使”就任1周年記念式典

新潟県中越沖地震からの復旧・復興を目指す出雲崎にとって大きな力となってくれたジェロへのお礼とこれまでのジェロと出雲崎のきずなをさらに深めるためにこのイベントが開催された。ジェロのトークでは、観光大使としての出雲崎町のPR方法やNHK紅白歌合戦の様子、昨年行われたファーストコンサートの様子について語った。「出雲崎のいいところは？」と聞かれたジェロは「出雲崎に来た時、真冬の日本海を見てジーンときた。そして、夏の夕日を見ても、ものすごくきれいで、今まで見た中で一番きれいだった」と答えていた。歌は「海雪」をはじめ計3曲を披露した。他MCは新潟のお笑い集団NAMARAのアルビレックス新潟の試合などの場内アナウンスを担当している「景勝」が務めた。またアルビレックス新潟（サッカー）や、新潟アルビレックスBB（バスケットボール）などで活躍するアルビレックスチアリーダーズのダンス、スコップ三味線⁵⁾の演奏などが行われた。またMCの景勝から「最後に出雲崎の皆さんにメッセージをお願いします」と言われたジェロは「今日は来ていただいて本当にありがとうございました。そして、呼んでいただきありがとうございました。皆様がものすごく心から応援してくださって本当に心から感謝しています。これからはずっと出雲崎の皆さんを大切にしていきたいと思っていますし、ずっと演歌歌手でいたいと思います。これからは応援よろしく願います」と笑顔で答えていた。この日はおよそ500人が集まった（『広報いずもぎき』（2010. 5）p.2より）。

■2010年8月14日 慕進いずもぎきイベント第2弾 汐風ドリー夢カーニバルⅢ

夏の風物詩となった汐風ドリー夢カーニバルは今年で3回目となった。野外ステージにはアルビレックスチアリーダーズ、バルーンアートのえんじゅる、新潟のローカルアイドル Negicco®などが次々と出演し、会場を盛り上げた。屋外のグルメ屋台では出雲崎の食材を使用したもずくめん、さざえカレーや、富士宮やきそば、たこやき、やぎのアイスクリームなどが販売された。他、全日本丸太早切り選手権イベント“みしま丸太早切り体験”が行われた。夕方からの屋内イベントでは、新潟県警察音楽隊の演奏、民謡歌手の剣持雄介とゆかりの、歌披露などが行われ、最後に町観光大使のジェロが登場し、1,500人がその歌声に酔いしれた。また、イベント終了後、ジェロCD販売&握手会を実施も行われた(『広報いずもぎき』(2010. 9) p.2より)。汐風ドリー夢カーニバルⅢの入場について、あらかじめ予約を取らなければならない、エリア指定席は2,000人、予約のいない自由席(スタンディング)は2,000人程度を予定しており、実際のエリア指定席への申し込みは町内560人、町外566人、合計:1,126人であった。

以上のように、ジェロは出雲崎で様々な震災復興に関わるイベントを行ってきた。成果として2009年1月、広報いずもぎき内の年頭のあいさつで出雲崎町議会議長 中川正弘氏はこのように書いている。「昨年は『ジェロさん』に始まり『ジェロさん』に終わった一年でした。度重なる災害から一昨年ホップして、昨年は『ジェロさん』でステップして、それを土台に今年は、新生出雲崎町・町民が生き生きと輝ける出雲崎町へ大きくジャンプと行きたいものです」(『広報いずもぎき』(2009. 1) p.2より)。このことから、一年を通してジェロは出雲崎で多くの活動を行っており、震災復興の原動力となっていると考えられる。さらにそれを裏付けるように、出雲崎の平成21年度施政方針内では、震災復興第2年次イベントの開催で出雲崎を全国に向けて発信していく動きがみられた。予算編成の重点施策には、⑤震災復興第2年次イベントの開催による、更なる町のパワーアップと全国に向けた情報発信について次のように述べられている。「平成21年度はこれまでの成果をもとに、いかに継続的に地域の活性化に結び付けていくかが問われる年になります。そこで、昨年実施できなかった恒例の船まつりと花火大会を復活させ、汐風ドリー夢カーニバルとドッキングさせ、さらにパワーアップして開催したいと考えております。ジェロさんの出演交渉も進めておりますが、ぜひとも実現させたいと願っております」(『広報いずもぎき』(2009. 4) p.3より)。また、翌年の平成22年度施政方針内でも、復興イベントから次に元気な出雲崎の姿をアピールするための施策として以下のような方針が固められた。予算編成の重点施策では、③各種イベントの開催による全国に向けた情報発信について「昨年、3度にわたる震災復興祈願イベントは述べ5万人を超える観光客を受け入れることになり、本町を全国に発信することができました。元気な出雲崎町の姿を県内外に広め続けるためには、これからいかに継続的に地域活性化に結び付けていくかが大きな課題であります。そのような中で、ジェロさんを迎える汐風ドリー夢カーニバル、船まつり、花火大会、絆、出雲崎おけさ全国大会などのイベントを継続実施してまいります」(『広報いずもぎき』(2010. 4) p.3より)。以上を見ていくと、2008年は出雲崎でのジェロの活動が震災復興への勢いをつけ、2009年も同じように全国に出雲崎をPRしていることがわかる。一方で、継続的に地域活性化に結び付けていくのが課題であると、住民に示しているのである。

このように、役場からの広報では一定の成果をあげられているように感じる復興イベントであるが、更に違う視点で分析してみたい。注目したのは、ジェロがメインとなっている汐風ドリー夢カーニバルの申込み状況である。

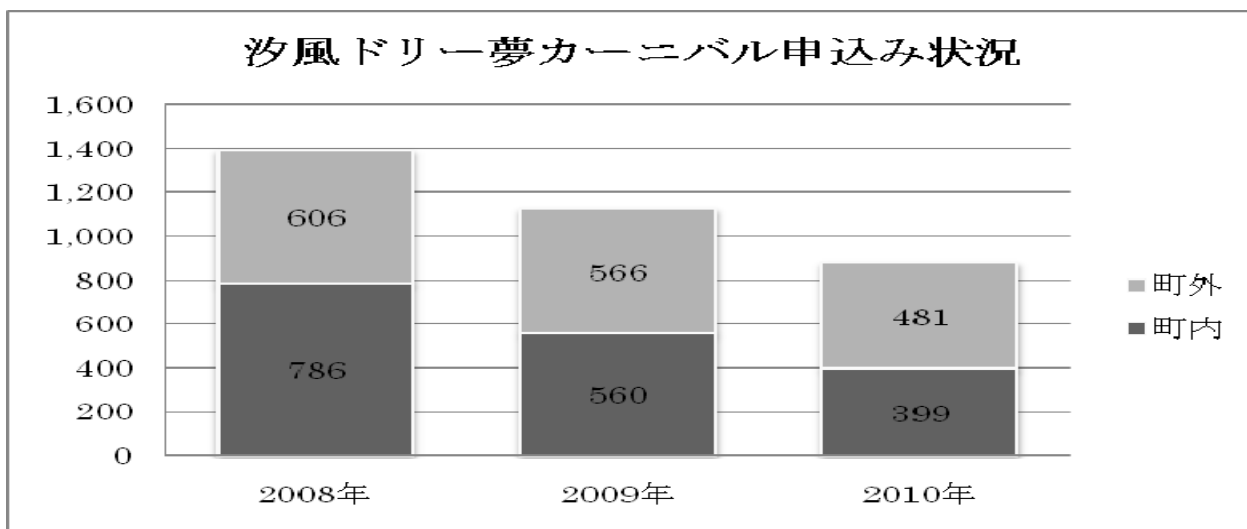


図5 汐風ドリー夢カーニバル申込み状況

資料：出雲崎町役場産業観光課から入手した資料により作成

図5は汐風ドリー夢カーニバルを観覧するに当たり、事前に申し込みを行った人々の人数である。この申し込みを行わなくとも、自

由席も設けられているので汐風ドリー夢カーニバルの総観覧人数とは異なる。しかし、予約一つで自由席より舞台は近くなり、出演者との距離も近くなるため、出演者のファンや出演者への期待値の一つの要素となると考えた。それを踏まえたうえで図5を見ると、汐風ドリー夢カーニバルの申込総数は年々減少しており、最新の汐風ドリー夢カーニバルⅢ（2010年）では、1,000人を切り、880人となった。また、汐風ドリー夢カーニバルⅠ（2008年）では町外の申込みより町内の方が多いのに対して、汐風ドリー夢カーニバルⅡ（2009年）ではほぼ町内と町外が同数となり、汐風ドリー夢カーニバルⅢ（2010年）では逆転し町外の方が申込数は多くなっている。その理由として二つの原因が考えられる。

一つはジェロの話題性である。人気が爆発的に出たのが、ちょうど2008年だったことが影響しているのではないかとことだ。二つ目は町民の減少率の多さで、申込み方法にも原因があると考えられる。申込みは役場へハガキ、ファックス、メールなどであるが、入場無料であり自由席は申込み不要のため、見に行くが申込みをしないというケースである。実際筆者は汐風ドリー夢カーニバルⅢで指定席の申込みをして見に行ったが、入場開始時にその場にはいない、つまり申込みはしたが会場には来ないという人が続出していた。しかし、ジェロの出演時間が迫ると会場には町民であろう人々が大勢集まっており、ジェロの人気の高さを知ると同時に無料であるが故の限界や、課題なども見えた。つまり、汐風ドリー夢カーニバルという一連のイベントから、ジェロの無料コンサートに変わっている、もしくは気が向いたら、また面白いプログラムだけ参加しようという形に変化しているのだ。いくら有名な演歌歌手を呼んでも、マンネリ化、魅力あるプログラムでなければ、例え無料であっても、さして興味のない住民は参加しなくなるのではないだろうか。また、2010年の汐風ドリー夢カーニバルⅢでは「震災復興イベント」ではなく、「鷺進いずもぎきイベント」と名前が変わっており、復興とともにその役割が終わった、もしくは住民同士の復興へ向けた連帯感の薄れが表れているとも考えられる。

5. 震災復興への文化活動の役割

前章では、出雲崎におけるジェロの活動を追うことで、出雲崎がどのようにジェロを応援していったのか、ジェロが出雲崎にどのような効果をもたらしたのかを見てきた。その上で、文化活動は震災にあった出雲崎でどのような役割を果たしたのかを考察していく。1章でも述べたように、被災した出雲崎の住民は、多かれ少なかれ心にダメージを受けたと考えられる。そのダメージを回復、またはやわらげるもの的手段として、出雲崎では復興イベントを行った。ジェロは実際に出雲崎を何度も訪れ、生の歌声を披露することで、人々の傷ついた心を癒していったと考えられる。またジェロ以外にも、出雲崎の復興イベントでは様々な歌手や団体が歌を披露している。たとえば、2008年10月に食・産業・歴史・文化を凝縮して開催された「震災復興祈願イベント第3弾きずな」では日本歌手協会復興支援コンサートが行われ、入場無料で田辺靖雄⁸⁾、原田直之⁹⁾、九重祐三子¹⁰⁾、山中明美¹¹⁾がその歌声を披露した。また“きずな”LIVEというタイトルで、出雲崎にゆかりのある歌手2名、J-RU¹²⁾（町内大門出身）、磯部真由美（良寛を歌う演歌歌手）のコンサートも行われた。更に2009年5月に行われた、町外からのカップルの結婚式を、町をあげて祝福する「震災復興祈願式年次イベント第1弾出雲崎マリビューウエディングⅡ」では、作詞家・女優などとして活躍している阿木燿子¹³⁾とコーラスグループ「ひふみレインボー」からのお祝いの歌や、記念ステージでは、貞心尼の心を歌う磯部真由美の「蓮の露」が披露された。ジェロ以外の出演者を見ると、演歌や歌謡曲を歌う歌手、また出雲崎にゆかりのある歌手が多いこと、更に普段は出雲崎で見ることができない有名な歌手に会えるというのも魅力であり、これは3章で取り上げた地方と演歌ビジネスの仕組みとマッチしていると言える。

以上のことは会場に足を運ぶが、どちらかという住民は歌を聴くという「受身」の姿勢である。ジェロが出雲崎にもたらしたのは、それだけではなく、住民に「参加する」という意識を芽生えさせたのではないかと考えられる。具体的には、4章で取り上げたように、ジェロの紅白出場を叶えるための「海雪」のCD購入運動や、ジェロの写真集への出雲崎町民の出演協力、ジェロの紅白出場を祝う会ではジェロが出雲崎に来なくても開催されるなど、住民のジェロを応援する意識の高さを感じることができる。被災者はただ励まされるという立場ではなく、被災する前よりも能動的になることで、出雲崎は元気であることを、ジェロを通して全国に伝えていったのではないだろうか。そしてこの気持ちや活動こそが、「心の復興」に繋がると考える。

更に、これらの一連の復興イベントは、役場による働きかけが大きく、その内容は、文化施設設立の意義と共通点があると考えた。根岸昭『文化政策学入門』（2010年3月21日）によると、「国・地方公共団体が文化施設を設置・運営するに当たっては、第一に、当該文化施設の設定・運営の『理念』が示されなければならない。これは、通常の場合は、文化政策の対象領域である『文化の振興と普及』または『文化財の保護』を担う物として抽象的に示されることになる。第2に、それぞれの施設ごとに、『目的』が示される必要がある。これは、各施設の性格に即した個別のものとなるであろう。理念と目的の設定は、文化政策における政策レベルの事柄といえる。第3に、これらの理念と目的のもとに、各施設として達成すべき『目標』が示されなければならない。目標としては、通常複数の物が設定されることとなるであろう。目標の設定は、文化政策における施策レベルの事柄といえる。第4に、これらの目標を達成するために、各施設の『事業』が企画され、当該事業を遂行するための管理が行われなければならない。事業と管理を合わせて『運営』と呼ぶことができる。運営は、文化政策における事務事業レベルの事柄といえる」とある。

これを出雲崎が行った震災復興に関わるイベントに置き換えてみる。理念は、地震風評被害からの脱却のため、復興イベントを開催することである。地震の風評被害に負けることなく、苦しんだ観光の活性化に向け、復興イベントを大々的に開催した。これによって元気があり光り輝く町づくりを实践するということである（『広報いずもぎき』（2008.4）p.4より）。目的は、各イベントにより個別化されるが、ジェロの参加した汐風ドリー夢カーニバルで言えば、夢と希望を音楽に乗せて元気な出雲崎を全国に発信し、災害からの

復興を大きくアピールすることである。さらに目標は、出雲崎の人々の本当の意味での復興、つまり物的被害の修復だけではなく心の安定や、傷ついた心のケアである。また、風評被害などにより落ち込んだ観光客を出雲崎に呼び戻すことなどが考えられる。そしてこれらの目標を達成するために行われたのが、一連の震災復興イベントである。

このように、**具体化された理念・目的・目標を住民に示すことは住民参加を促すうえで非常に重要になってくる**と言える。この他にも、5章で紹介したように、CD 一世帯一枚購入町民運動や、写真集『ジェロ海雪。——僕とおばあちゃん』や、震災復興イベントにおいて共通しているのは、**住民が単にジェロの曲を聴くだけの消費者ではないということである**。CD を一枚買うことに対して、ただ一個人としてではなくジェロを町ぐるみで応援する一市民として買う、という意味合いを持たせている。自らが出雲崎市民としてCD を購入したり、写真集にジェロと写ったり、震災復興イベントに参加することこそが重要なのである。受動的な立場で文化を享受しているだけではなく、住民に主体性を持たせることこそが地域活性化に必要不可欠である。だが、ここまで具体的な活動を行ったとしても先述した文化施設の場合と同じように、課題もある。

また、同じ震災から復興するための文化活動の一例として、神戸ルミナリエの効果と課題を比較したい。神戸ルミナリエはイタリアのアートディレクター、ヴァレリオ・フェスティ氏と神戸市在住の作品プロデューサー、今岡寛和氏による「光の彫刻作品」である。「神戸ルミナリエ」は、阪神・淡路大震災犠牲者の鎮魂の意を込めると共に、都市の復興・再生への夢と希望を託し、大震災の起こった1995年12月に初めて開催され、震災で打ちひしがれた神戸の街と市民に大きな感動と勇気、希望を与えた。閉幕直後から、市民や各界から継続開催を求める強い声が寄せられ、都市と市民の希望を象徴する神戸の冬の風物詩としての定着を目指すことになった（「神戸ルミナリエ」公式ホームページより）。**この事例と出雲崎の共通点は、同じように震災により疲弊した地域を文化の力を使って復興させようというものである**。その手段として、神戸市はルミナリエを、出雲崎町はジェロを用いたわけである。神戸ルミナリエは2010年も無事に開催され、会期中は343万人の人が訪れたという。震災からの復興としての意味合いは大きく、毎年多くの観光客も集めている。だがその一方で、多くの課題が浮き彫りとなっているのも事実である。一つは神戸ルミナリエの本来の開催目的を忘れ、単なるイベント化になってしまっているのではないかとということである。この指摘は近年目立つようになったわけではなく、震災から6年後に開催された2000年12月17日の『神戸新聞』にも掲載されている。紙面によると、当時の市観光交流課の渡辺由和課長は「ルミナリエは神戸の震災文化を語り継ぐ象徴。どうしたら、その精神を伝えられるのか。資金面も含め、市民と考えていかなければ」と話している。理念をいかにして理解してもらうかが課題であると考えられる。その意味でも、訪れる人が飽きないような、またきちんと開催される意味を知ってもらう機会を設けるのが重要である。実際に神戸ルミナリエは2010年、遺族や被災者が体験を語り継ぐ場を初めて設けた。「若い世代が震災を知る手助けになれば」という試みからである。13日までに約10人の語り部が命の尊さを訴えるなど、プログラムにも配慮が必要である。その点でいえば、出雲崎は2008年から2009年までのイベントには震災復興とつけていたのに対し、2010年に開催されたイベントは慕進いずもざきイベントと名前を変えている。これが神戸ルミナリエとの明確な違いといえる。

以上の事例を通し共通してあげられる課題は、地域と自治体、住民と地自体がどのような形で協同を作っていくか、ということである。先のように文化施設を設置運営、また神戸ルミナリエを開催するための理念・目的・目標があっても、そのまちの主役である市民の賛同が得られなければ存続することはできないだろう。このことから、出雲崎とジェロの今後の課題としてあげられるのは参加を組織化し、継続するのが大切なのではないかと考えた。これがないとジェロによる、地域活性化は持続しないということである。実際に汐風ドリー夢カーニバルの申込みが毎年徐々に減っていることから、ジェロと役場の力だけでは地域活性化が難しいことが分かる。**その解決策としてたとえば、文化ホールの多くに見られる「友の会」のような会員制度を作るということである**。出雲崎という小さな町での運営であることを活かし、友の会の集いを開催して、会員相互また、役場や観光協会と会員の繋がりを作るなどが考えられる。また、震災復興を遂げた後もいずもざき観光大使としてジェロとどのように関わっていくのが今後の課題である。

以上を踏まえうえて、次章では本稿のまとめとして、これから先、演歌歌手ジェロによる地域活性化は可能かを考察する。

6. 演歌歌手による持続的な地域活性化は可能か

震災復興を遂げた出雲崎だが、人口減少や少子高齢化などの問題はなくなることはないだろう。このような問題と向き合いながら、これから先ジェロとともに出雲崎はどのようにして地域活性化を続けてゆけばいいのだろうか。

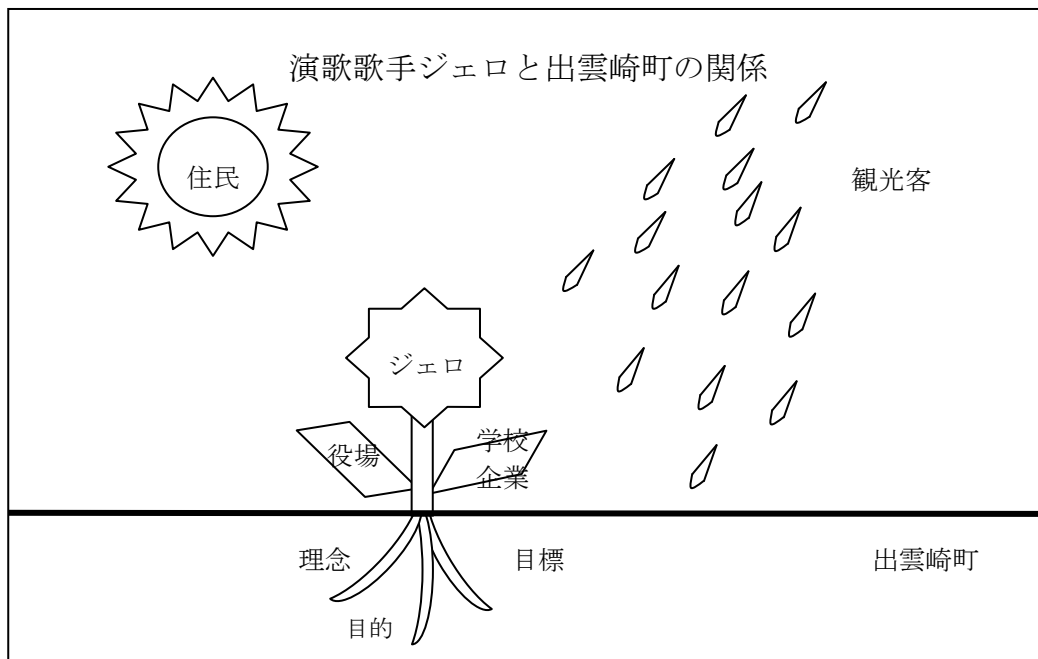


図6 演歌歌手ジェロと出雲崎の関係

図6はジェロと出雲崎の関係の花の成長にたとえ、筆者が作成したものである。この図を用いて、これまで本稿で議論してきた内容をまとめてみたい。花はジェロ本人、葉は役場や学校、企業などを、根は何故ジェロを支えるのかという理念、目的、目標を表す。根を張る土は出雲崎町を表し、空から降っている雨は外部からの観光客、太陽は出雲崎住民とした。はじめに、土である出雲崎町の特徴は、高齢化の進む地方だということである。この土は演歌歌手であるジェロと相性がよく、花が育ちやすい環境と言える。次にその土にきちんとした理念・目的・目標を根付かせることが大切で、この根が伸びなければ花は育たず、ジェロは出雲崎に受け入れられないだろう。次に、光合成や呼吸を行う葉は出雲崎役場や学校、支援企業などで、太陽（住民）の温かい光や、雨（観光客）の恵みを受けて花であるジェロを成長させるのだ。この他、雨である観光客はその土地に降ることで、花に元気を与えるのはもちろん、土である出雲崎町も元気にするのだ。また、花が大きくなればなるほど、雨の量（観光客数）も増えるだろう。それを受け止めるには大きな葉が必要であるし、根も深く張り巡らされていなければならない。また、太陽の力も重要な役割となるだろう。花を大きくしていくためには、それぞれがきちんとした意識を持ち、取り組まなければならないことが分かる。

最後に、筆者が参加した2010年の「汐風ドリー夢カーニバルⅢ」の中で出雲崎町町長は、以前ジェロが自分の**第二の故郷は大阪であると発言していたことを非常に悔しがっていた**。いつか出雲崎町もジェロの故郷のような存在にしていきたい、と述べた上で、観光大使ジェロとともに出雲崎をもっと盛り上げていきたいと語っていた。出雲崎の地域活性化に必要なのは、**町長の言うジェロに出雲崎を故郷だと思ってほしい、という「悔しさ」を住民一人ひとりが抱き、「住民参加」という形で出雲崎をアピールすることではない**だろうか。これは、出雲崎が震災という「逆境」の中で、復興イベントを積極的に行ったり、CD購入運動などを通じてジェロを出雲崎町民として応援したりしたのと同じである。その結果、今まで無名だった出雲崎が、ジェロの「海雪」と震災に見舞われたのをきっかけに全国区となった。ここから次に繋げるきっかけづくりが、今後の課題である。近年、熱狂的なファンが、自身の好きな漫画やアニメなどの著作物に縁のある土地を「聖地」と呼び、実際に訪れる「聖地巡礼」という観光が流行している。ジェロはもちろん、全国のジェロファンが、出雲崎をジェロの聖地（故郷）と認めれば、地域活性化の輪がさらに広がるかもしれない。

注

- 1) 83年以降、作詞家として、美空ひばり『川の流れのように』をはじめ、数々のヒット曲を生む。08年11月、ジェロ『海雪』で第41回日本作詩大賞を受賞する。09年12月、第51回日本レコード大賞・特別賞をAKB48とともに受賞した。
- 2) 1973年にダウン・タウン・ブギウギ・バンドを結成しデビューした。作曲家として、山口百恵さん等の多数のアーティストへ楽曲を提供している。
- 3) 現在、NHK総合テレビ「それいけ！民謡うた祭り」にレギュラー出演している。出雲崎のイベントに数多く参加し、2010年「轟進いずもぎきイベント第三弾きずなⅢ」において、出雲崎おけさ大使に就任した。
- 4) 2007年、良寛と貞心尼の愛の歌「蓮の露」でデビューする。歌はポップス、演歌などを中心に歌う。
- 5) スコップと栓抜きを用いて、音楽に合わせて津軽三味線の真似をして演奏するもの。津軽三味線の叩きつける音とスコップを叩く音がマッチして、本当に弾いている感覚を演奏者、聴衆ともに味わうことができる。楽器演奏の技術を必要とせず、誰でも行うことができるが、本当に弾いているように見せるには、熟練のワザを必要とする。
- 6) 新潟の名産品「やわ肌ねぎ」のPRユニットとしてデビュー以来、ローカルアイドルのトップランナーとして全国的に注目されている。
- 7) 2008年コロムビアミュージックエンタテインメントより隠岐むすめゆかりの民謡をリリースする。現在は、NHK総合テレビ「それいけ民謡うた祭り」にレギュラー出演している。

- 8) 日本の歌手、俳優である。一般社団法人日本歌手協会代表理事を務める。ワイ・アンド・ワイ所属、妻は歌手・女優の九重佑三子である。代表作「ヘイ・ポーラ」（シングル）（1963）。
- 9) コロムビアミュージックエンタテインメント所属の民謡歌手である。2008年民謡民舞全国大会にて（財）日本民謡協会より「民謡名人位」を受章する。
- 10) 日本の歌手、女優である。1962年ダニー飯田とパラダイスキングの一員としてデビューする。翌年「シェリー」でレコードデビューし、大ヒットとなる。
- 11) 原田直之音楽事務所に所属し、2000年コロムビアレコードより「郡上節」でデビューする。現在、民謡歌手としてテレビ番組などに出演している。
- 12) 2004年よりR&Bシンガーとしての活動をスタートする。新潟県内のクラブシーンを中心に精力的にLIVEを行う、新潟在住のシンガーである。
- 13) 作詞家、作家、プロデューサーである。宇崎竜童と結婚後、宇崎と共に山口百恵の曲の作詞・作曲を手掛け、山口百恵の黄金時代を支える。沢山のアーティストに詞を提供し、数々のヒット曲を世に出している。現在ではコーラスグループ「ひふみレインボー」を主宰し、コーラス活動にも力を注いでいる。

参考文献

- ・『演歌は不滅だ』演歌ルネサンスの会編、株式会社ソニー・マガジズ、2008年7月15日
- ・『ジェロ 海雪。——僕とおばあちゃん』青志社、2008年8月11日
- ・『サンパの国に演歌は流れる—音楽にみる日系ブラジル移民史』細川周平著、中公新書、1995年9月25日
- ・『新編音楽中辞典』株式会社音楽之友社 2002年3月10日
- ・『文化政策学入門』根岸昭著、株式会社水曜社 2010年3月21日
- ・『文化ホールがまちをつくる』森啓編著、学陽書房、1991年8月20日
- ・神戸ルミナリエ公式ホームページ：<http://www.kobe-luminarie.jp/>
- ・復興・検証「ルミナリエ」：<http://www.kobe-np.co.jp/sinsai/kensyo/001217lumi1.html>
- ・ORICON STYLE ジェロ：<http://www.oricon.co.jp/prof/artist/445413/>
- ・出雲崎町役場ホームページ：<http://www.town.izumozaki.niigata.jp/>
- ・出雲崎観光協会ホームページ：<http://izumozaki.ecnet.jp/>
- ・ジェロオフィシャルウェブサイト：<http://www.jero.jp/pc/>
- ・てまり団地：http://www.town.izumozaki.niigata.jp/anjuu/temari/temari_top.html
- ・村山涼一のwebセミナー：<http://www5e.biglobe.ne.jp/~muraryo/index.html>
- ・AKB48公式サイト 秋元康プロフィール：<http://www.akb48.co.jp/akimoto/>
- ・総務省 報道資料 統計トピックスNo. 48 統計からみた我が国の高齢者 p.2 2010年9月19日
PDF：<http://www.stat.go.jp/data/topics/pdf/topics48.pdf>
- ・宇崎竜童公式サイト：<http://ryudo.jp/profile/>
- ・新潟お笑い集団 NAMARA：<http://www.amekago.net/blog/namara.php?itemid=1431>
- ・スコープ三味線について：<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B9%E3%82%B3%E3%83%83%E3%83%97%E4%B8%89%E5%91%B3%E7%B7%9A>
- ・Negicco公式サイト：<http://negicco.net/index.php>
- ・田辺靖雄プロフィール：<http://talent.yahoo.co.jp/pf/profile/pp9093>
- ・原田直之音楽事務所ホームページ：<http://ha-naog.jp/index.html>
- ・田辺靖雄&九重佑三子公式サイト：<http://www.isp.ne.jp/~yandy/>
- ・J-RU オフィシャルブログ：<http://profile.ameba.jp/jru-blog/>
- ・阿木耀子公式WEBサイト：<http://www.yokoaki.jp/index.html>
- ・『広報いずもぎき』 2008年8月号P.4
- ・『広報いずもぎき』 2008年9月号P.4
- ・『広報いずもぎき』 2008年12月号P.10
- ・『広報いずもぎき』 2009年1月号P.2
- ・『広報いずもぎき』 2009年1月号P.4
- ・『広報いずもぎき』 2009年4月号P.3
- ・『広報いずもぎき』 2009年5月号P.4
- ・『広報いずもぎき』 2009年7月号P.2-8
- ・『広報いずもぎき』 2009年12月号P.2-3
- ・『広報いずもぎき』 2010年5月号P.2
- ・『広報いずもぎき』 2010年9月号P.2